

日本温泉科学会の生い立ち

大阪教育大学教授 伊 東 祐 一

(昭和44年7月30日受理)

A Short History of "The Balneological Society of Japan"

Yuichi ITO

Professor, Osaka Educational University

日本における温泉科学の発達には、昭和年代に入って、その広汎な範囲にわたる各種研究が行なわれるまでは、特に見るべきものがなかった。(筆者編・温泉文献目録、温泉科学12巻2号～13巻1号、1961～62年参照)

古く徳川時代において一部の先覚者によって、温泉の医療的効果、温泉分析などが行なわれたが、それらは当時の科学の水準からして甚だ粗放なものであった。しかし温泉学の歴史を物語る際には、忘れることの出来ないものがあり、温泉医学の始祖後藤良山、温泉医書の最初の著者拓植竜州(温泉論4巻、文化6年)、温泉をはじめて分析した宇田川榕庵(舎密開宗、外篇第7巻、天保8年)など温泉学史上、不朽の名をとどめている。

明治時代に入り泰西の文化の流入と共に、一般科学の進展に伴って、温泉に関する研究、その報告(主として医学的のもの)も散見されるようになったが、殆んど断片的なもので、系統的なものは見られなかった。ラジウムの発見(1898年)により、これによって温泉の医治効能を解明しようとの試みが行なわれ、温泉中に含有されるラジウム、ラジウムエマナチオンに関する研究が、少なくなかったことは注目に価する。

大正時代には温泉研究について見るべきものはなかつたが、強いて上げれば、石津利作博士の調査、報告の集大成である「The Mineral Springs of Japan」は、日本の温泉をはじめて海外に紹介したのものとして特筆さるべきであろう。

昭和年代の初頭から温泉の科学的研究は活発になり、温泉国日本の面目を発揮しはじめた。その結果、医療研究施設も漸く整い、研究者の数も増加して来た。しかし第二次世界大戦の勃発によって、国の総力を戦争目的に集中するにいたったため、温泉の研究は特殊な問題以外、中絶することを余儀なくされた。そのため漸く芽をふき出した双葉も、あえなく萎縮してしまった。

これより先、昭和4年、東京科学博物館において、温泉に関する一切の資料を、蒐集して展覧に供するという画期的な催しが開かれた。又、同年、鉄道、内務両省の関係識者、専門学者の発議によって、社団法人日本温泉協会が創定され、温泉地の開発、改善、指導を行なうと共に、月刊雑誌「温泉」が発刊され、今日にいたっている。昭和6年、はじめて温泉の医学的利用、研究機関として九州大学は別府市に温泉治療学研究所を創設し、続いて昭和10年、北海道大学は登別に、12年、鹿児島大学は霧島に、14年、岡山大学は三朝に、19年、東北大学は鳴子に、夫々温泉の研究並びに治療の施設を設けた。又、昭和9年、酒井谷平、林春雄、真鍋

嘉一郎の諸氏によって日本温泉気学会候が設立され、翌年に学会誌の発刊を見、ここにはじめて温泉医学に関する発表機関の誕生を見るにいたった。

このように温泉に関する研究は、年と共に盛大となって来たにもかかわらず、温泉関係諸科学の横のつながりを持つ機関のないことが、痛感されるようになった。そこで昭和14年、温泉に関する各分野の学識、研究者の集りである温泉研究談話会が、藤浪剛一、中村清二、岡田弥一郎、木村健二郎、江本義数、吉村信吉の各氏に私も加わって結成され、この会は発足の際の申し合せにより、同16年に日本温泉科学々に改組され、同時に季刊誌「温泉科学」が発刊され、今日に及んでいる。

この会の創設に当って、いささか私事にわたって恐縮ではあるが、将来の記録として少し詳しく述べておきたい。昭和時代に入って温泉に関する諸科学領域の研究は着々進展しはじめたので、恐らくそれら科学の相互間の連繋の必要性を認め、なんらかの機関を設くべきだと考えていた人はあったろうが、その機会、発議者がなかったことと思う。かねてから私は温泉国日本などといながら、その研究の貧弱さ、特に発表機関の欠除などに対して少なからず不満を感じていたので、なんらかの形で研究者相互の連絡、発表の場の設定など、その必要性を痛感していた。しかしわずかに温泉動物の研究の一端を担っている若輩にとっては、考えるだけが、関の山で現実にとどうすることもできなかった。

おりもおり、忘れもせぬ昭和14年5月16日、温泉動物研究を行なっていた東京高等師範学校教授岡田弥一郎博士を中心とした同好者の懇親会の席上、私から温泉学会設立に関する意見を述べたところ、同博士も私と同感であるとの主旨を述べられ、早急に当時温泉に関して研究を担当されていた方々、即ち温泉分析を意欲的に行なっていた東京大学の木村健二郎教授、温泉医学にその情熱を注がれていた慶応義塾大学の藤波剛一教授らと相談の上、何名かの方々に創立世話人になっていただき、その人々の連名の下に、創立趣意書を作って、関係者一同に配付することを決定した。そこで私が犬馬の労をとることとなり、5月20日東大に木村教授を、同26日慶大に藤波教授を訪問、学会創立に関し意見を求めたところ、いずれも快諾され、一方、22日には文理大に吉村博士、29日には学習院に江本博士を訪ね発起世話人たるの承諾を得た。そこで6月12日の夕刻、華族会館で第1回の温泉学会創設世話人会を開いた。出席者は藤浪剛一、木村健二郎、岡田弥一郎、江本義数、吉村信吉の5博士と私の6名で、晚餐をともに創設に関する種々の問題を協議した。その結果学会創立に先立って研究談話会のごときものを作り、その発起人に関係者100名位を依頼、賛同された方の連名で入会勧誘案内状を送し、9月頃に第1回談話会を開催することに決め、本部を東大化学教室に、事務所を慶大藤浪教授室に置くことにした。

その後発起人を承諾された方が数10名に上ったので、第2回世話人会を7月26日、東京神田の学士会館で開いた。その時の出席者は柴田雄次、三沢敬義、木村健二郎、江本義数、朝比奈貞一の5博士と私の6名で、世話人発起人の中から朝比奈貞一、江本義数、岡田弥一郎、木村健二郎、菅原健、津屋弘達、平山崇、藤浪剛一、三沢敬義、宮部直己、吉村信吉(五十音順)の11氏と私の12名が幹事に指名された。又、できるだけ早い機会に温泉科学学会に改組することを前提として、一応会の名称を温泉研究談話会とし、会務の分掌を編集三沢敬義、会計木村健二郎、庶務岡田弥一郎の各博士ときめ、第1回研究談話会を10月7日に開催することを決定した。

第1回幹事会は9月20日神田の学士会館で開催され、藤浪、木村、三沢、岡田、朝比奈、

津屋、宮部、江本、吉村、菅原の10幹事と、黒田和夫、上村三男の両氏が出席した。藤浪博士を座長に各幹事の紹介があり、木村幹事から温泉研究談話会発表会趣意書及び入会勧誘状発送の報告があり、同日現在入会申込者183名と報告された。第1回研究談話会は創立記念講演会として10月7日に開催することとし、その細目を話し合い、第2回講演会を12月中旬に開催すること、かねて入選中の会長に東京帝国大学名誉教授中村清二博士を推せんすることなどがきまった。

創立記念講演会は10月7日、東京上野の科学博物館講堂で開催され、中村会長の開会の辞、岡田弥一郎博士の「日本の温泉動物について」藤浪剛一博士の「日本温泉治療学の発達史」の2講演があり、映画「健康は温泉から」、「聖地高千穂」の2巻が上映された。来会者約80余名を数え、初めての試みとしては盛況裡に閉会した。第2回の幹事会は11月16日、学士会館において中村会長、藤浪、木村、朝比奈、江本、吉村、黒田、村上の各氏と私が出席し、講演の原稿を載せるため、「温泉研究談話会誌」を発行することとし、また会員名簿を作製することにした。11月10日現在の入会申込者数は230名であった。第2回講演会は12月7日東京神田の鉄道博物館講堂で開かれ、菅沼市蔵博士の「硫黄泉を巡る」、高安慎一博士の「天然温泉の特異性について」の2講演と映画の上映があった。第3回講演会は、15年2月12日神田淡路町の東京医師会館講堂で、中村左衛門太郎博士の「温泉と地球物理学」という講演があり、続いて第4回講演会は、3月30日鉄道博物館講堂で、武田軍治氏の「温泉保護の法律的方法」、三沢敬義博士の「温泉療法について」の2講演と、映画「青年徒歩旅行」「勤労の村々」の2巻が上映されたが、これらは前回の「聖地高千穂」と共に温泉には関係なく時局を反映したものといえよう。第5回講演会は6月20日、鉄道博物館講堂で、木内信蔵氏の「温泉および温泉聚落の地理的分布」なる講演及び映画「温泉風物誌」と「鉄論」の2巻が上映された。この頃になると講演会場をどこにするか、その借用在が段々困難になってきた。

半年ぶりに15年6月25日、第3回幹事会を東京銀座の交詢社で朝比奈、江本、岡田、木村、黒田、菅原、藤浪、三沢、吉村の9幹事と私が出席して開催し、既定方針に従いできうれば16年1月から学会が発足できるよう、準備を進めることにつき話し合いをした。当時の年会費は1円で、「既納会費1円は1年分とし、本年分1年を徴集し計2円とし、これをもって既発行号及び本年度発行予定号に対する会費とす」と記録されている。30年の間に本会の会費は1500倍になったわけで、まことに隔世の感がある。この時に会計報告がされたが、その記録は残っていない。入会者は益々増加し43名を加えている。第4回幹事会は9月13日、同じく交詢社で朝比奈、江本、木村、黒田、菅原、藤浪、三沢、宮部の9幹事と私が出席し、当時のわが国の状況から、16年1月から学会への改組が困難ではないかということが憂慮され、各幹事の一段の努力が要望された。しかし会員は更に16名の入会が報告されている。第5回幹事会は9月25日、鉄道博物館会議室において朝比奈、江本、木村、藤浪、黒田の8幹事と私が出席し、私から学会への改組学会誌発行の見通しがついた旨の報告をした。引続いて同館講堂で第6回講演会が開催され、山田醇氏の講演「温泉旅館雑感」と映画2巻が上映された。この時に新入会者32名が報告された。第6回幹事会は11月9日東京日比谷の陶々亭で開かれ、中村会長、朝比奈、江本、木村、黒田、菅原、藤浪、三沢、宮部の8幹事と私が出席し、研究談話会を学会に改組の件を決め、事務所を文部省専門学務局科学課内に移した。第7回幹事会は11月27日鉄道博物館会議室において開かれ、中村会長、朝比奈、江本、岡田、黒田、菅原、藤浪、宮部の7幹事と私が出席し、学会名を正式に日本温泉科学学会と決定し、会則原案を若干

修正の上、可決した。同日同所で第7回講演会を開催、野口喜三雄博士の「本邦間歇泉の化学的研究」なる講演と映画「海底の鉄路」「ミュンヘン科学博物館」の2巻が上映された。第8回幹事会は12月8日学士会館において開催、中村会長、朝比奈、江本、岡田、木村、黒田、菅原、平山、宮部の8幹事と私が出席、学会誌を「温泉科学」と命名し、寄稿規定原案を審議の上、一部修正して可決、中村会長の指名により温泉研究談話会幹事全員が学会の理事に、藤浪博士が副会長に、理事のうち木村、三沢、岡田、江本の4氏と私が常任理事に決定された。この間に「温泉研究談話会誌」は第1号(14年11月)から第7号(16年1月)まで発刊され、それぞれ第1回から第7回までの講演が掲載され、「温泉科学」に発展的解消をした。

学会に改組された昭和16年は、わが国が第2次世界大戦に突入した年で、刊行物の統制、雑誌の併合、用紙の配給などが強化されて、学会運営にいろいろな障害の多くなってきた時代で、当時の役員は並々ならぬものがあった。内務省(ここで出版物の検閲をしていた)や、用紙の配給会社に足をはこぶことも再三で、その当時の奥付に会員番号222206とあるは、その名残りである。定価1部1円、半年2部2円(郵税共)1年4部4円(郵税共)とあり、次に(停)と記され、広告料1頁30円、特別欄50円で中々高額のものであった。その数字は壺、式、参という文字が用いられ「単に御申込みの節は振替用紙郵送可仕候間御送金被下度候」にいたっては現今の人々に解しがたいものがある。これが27~28年前のことで、如何に世の変遷の著しかったかは想像以上のものがある。

当時のエピソードの若干を記しておこう。15年の暮頃から食糧品のみならず紙類などの統制もきびしくなり、新刊雑誌の発行は認められないとの噂が出て、せっかく計画した「温泉科学」の発刊も危ぶまれてきたので当時私の義弟の友人に内務省の関係担当官がいたので、早速同氏に質したところ、「學術雑誌は差支えないが、統制は益々強化されるから、早急に発刊の手続きをするよう」との忠告があったので大急ぎで刊行の準備をすすめた。創刊号、つまり第1巻第1号(16年3月)が、実際印刷所から私の手元に入ったのは、8月14日であった。時局が時局である上に、安くて立派な雑誌を作ろうというのだから、中々印刷の引受け手がなく苦心したが、幸い藤浪博士の斡旋によって、成文堂が誠意をもって引受けてくれたことは、まことに感激のいたりであった。また、紙が所定量で不足勝ちになった際、芦屋に転住されておった中村会長が、「ストックしてある紙があるからそれを使うように」との御親切な申し出もあったなど、役員各位の並々ならぬ努力と共に、忘れることのできない思い出である。その藤浪、中村両先生も既に故人となってしまわれ、当時を話すよすがもない。

改組後の第1回講演会は16年1月27日慶応大学医学部付属院講堂で、茂木蔵之助博士による「創傷に対する温泉療法」なる講演があり、第1回理事会は2月1日銀座交詢社において中村会長、藤浪副会長、朝比奈他10理事出席、事務分掌の編輯を朝比奈、江本、庶務を岡田、伊東、会計を木村の各理事と決定した。第2回講演会は3月10日神田の結核予防会講堂で、小林儀一郎博士の「本邦温泉の地質的分類並びに温泉湧出と地質構造線の関係について」なる講演があり、第2回理事会は3月29日交詢社において中村会長、藤浪副会長、朝比奈他6理事出席、会誌の内容、構成、会名、誌名の欧訳などを決め、出版文化協会加入の件について相談した。第3回講演会は5月10日、学習院において江本義数博士の「日本の温泉植物について」なる講演があり、続いて同所で第3回理事会を開催、6理事出席、会誌発行について事前に当局の了解を得ることとし、前記のようにこの点については5月19日江本理事と私が、内務省検閲課に出向いて了承を得た。第4回理事会は9月13日、交詢社において藤浪副会長、朝

比奈他 5 理事出席、会誌第 1 巻第 1 号創刊に関する報告、前記の出版文化協会加入手続きは 7 月 14 日に岡田理事と私が同協会に向いて手続きを行なった旨報告があった。旧学術講話会管理者今村繁三氏から同会基金の利子を今後本会に寄贈する旨申出があり、本会はその厚意を容れ、会則第 6 条第 3 項によって同氏を、名誉会員に推せんした。第 4 回講演会は 12 月 4 日、東京医師会館講堂において増山元三郎博士の「気象病について」なる講演があった。

第 5 回講演会は 17 年 3 月 28 日に東京科学博物館講堂において、松尾武幸博士の「温泉の刺激と生体の反応」、岩崎岩次博士の「温泉化学上の 2、3 の問題」なる講演があった。第 5 回理事会は同日同所会議室において中村会長と 4 理事それに私が出席、庶務、会計担当者から夫々の報告があった。第 6 回講演会は 6 月 8 日、慶応大学医学部講堂において小穴進也博士の「温泉の重水濃度」なる講演があり、第 6 回理事会は 9 月 28 日に日比谷東洋軒において中村会長、藤浪副会長、江本他 7 理事出席、昭和 18 年度から会費年額 4 円 (16、17 年度は 3 円であった) に値上げを決定した。本会創立の功労者であった副会長藤浪剛一博士はかねて病氣療養中のところ、11 月 29 日逝去され、12 月 2 日の告別式には本会を代表して中村会長が弔辞をおくられた。第 7 回理事会は 12 月 18 日、日比谷東洋軒で開かれ、中村会長、江本他 3 理事出席、藤浪副会長の後任に江本義数博士を推せん、同時に同氏を出版文化協会の本会代表者に決定した。又かねて第 1 回理事会の際に評議員は会長から候補者を指名し、その諾否を得ることとしていたが、11 月下旬までに石橋雅義、岡田武松、衣笠豊、小林儀一郎、高安慎一、武田軍治、築地宣雄、野満隆治、福富孝治、藤原咲平、松尾武幸、松山基範の 12 氏が快諾された。第 8 回理事会は 18 年 5 月 22 日、本郷の鉢の木で開かれ、中村、江本正副会長、朝比奈他 5 理事出席、出征会員は会費を免除すること。藤浪理事の後任に春名英之博士を決定した。第 7 回講演会は 6 月 26 日、東京帝大理学部化学教室において、木村健二郎博士の「引湯による温泉成分の変化数例」、広瀬六郎博士の「温泉工学について」なる講演があり、第 8 回講演会は 9 月 8 日、東京帝大理学部化学教室において小穴進也博士の「湯俣温泉について」なる講演があった。

この通算 15 回の講演会と第 8 回理事会を以って、わが国の当時の戦局の事情から、本会の運営も困難となり、一部の事務的な面を除いてその運営停止を余儀なくされた。この間に会誌は第 3 巻 3 号 (18 年 9 月 30 日) まで発行された。(これに掲載された論文題名については第 16 巻 3—4 号、156 頁を参照されたい)

当時の会員数は 399 名を数え、内名誉会員 1 名、特別会員 18 名であった。役員は会長中村清二、副会長江本義数、理事は編輯担当朝比奈貞一、江本義数、庶務担当、岡田弥一郎、藤巻時男と私、会計担当木村健二郎、黒田和夫の各氏の他、菅原健、津屋弘達、平山嵩、三沢敬義、宮郎直巳、吉村信吉の 6 氏、評議員は前記の 12 氏であった。会計状態は昭和 16 年度が収入 1,272 円 79 銭 (内前期繰越金 77 円 57 銭) 支出 1,272 円 77 銭 (内次期繰越金 461 円 47 銭)、昭和 17 年度は収支各々 1,540 円 76 銭であった。

以上が本会創設時戦前から戦中の概況であるが、わが国が未だかつて経験したことのない敗戦という余りに大きな衝撃の下で、国民は全く虚脱状態に陥入って混沌とした世相の中でその日その日の食に追われ、何を考えるいとまもなかった。このような状態の下で学会の再建など、及びもつかないことのようにであったが、役員並びに会員一同の絶大な協力によって、各種の学会に先立って、22 年には再興の萌芽がきざし、遂に 23 年 5 月にはその実を結び、5 月 1、2 両日兵庫県城崎温泉において戦前に開き得なかった、本会最初の大会であり、戦後初めての集りである第 1 回大会を開催する事が出来た。

この開催に当っては当時の日本温泉協会副会長西村佐兵衛氏の力に負うところが大きかったことを特記しておきたい。時はよし所はよし、また交通、食糧事情など甚だ不便な時代ではあったが、北は北海道、南は九州から会するもの70余名加うるに町内有志の参加もあり、広くない公会堂は満員の盛況であった。私が開会の辞を述べ、会長挨拶(代読)、各担当理事の会務報告、会則改訂、役員選出、続いて27題の研究発表と太秦北大教授の「温泉の変化について」なる特別講演を以て第1日を終り、第2日目は町当局の案内によって、温泉地内の各源泉、浴場などを視察した。会誌の復刊は1年おくれ、24年7月20日に第3巻4号の発刊を見、その後今日に及んでいる。尚戦前のバックナンバーは非常に少ないので、その掲載演題名は前記のように第16巻3—4号に載せたが、再刊後のものについては省略した。(戦後のバックナンバーは残部があるので、必要な方はお申出下さい)

戦後はじめて正確に会員数が記録されたのは24年5月31日で、その時は463名に上っていた。

第2回大会(昭和24年)から第17回大会(昭和39年)までは、第16巻第3—4号(41年3月)にその概況を記してあるので、ここにはその開催年と場所などを摘記しておく。

- 第2回大会、昭和24年8月5、6日、長野県野沢温泉、村役場会議室において、
- 第3回大会、昭和25年4月10、11日、和歌山県勝浦温泉、小学校講堂において、
- 第4回大会、昭和26年4月7、8日、静岡県嵯峨沢温泉、上狩野中学校講堂において、
- 第5回大会、昭和27年7月20、21日、大分県由布院温泉、山水館ホールにおいて、
- 第6回大会、昭和28年7月20、21日、福島県飯坂温泉、町公会堂において、
- 第7回大会、昭和29年7月19、20、21日、岩手県花巻温泉、公会堂において、
- 第8回大会、昭和30年7月24、25日、鹿児島市旭文化ホールにおいて、
- 第9回大会、昭和31年7月14、15日、新潟県松之山温泉、凌雲閣大広間において、
- 第10回大会、昭和32年7月16、17日、松山市道後温泉、宝荘において、
- 第11回大会、昭和33年7月13~16日、山形県上ノ山温泉、市公民館において、
- 第12回大会、昭和34年7月16~17日、長野県上諏訪温泉、片倉会館において、
- 第13回大会、昭和35年7月18~20日、広島県湯来温泉、公会堂において、
- 第14回大会、昭和36年8月16~19日、群馬草津温泉、草津中学校体育館におゝて、
- 第15回大会、昭和37年8月20~23日、鳥取県三朝温泉、温泉会館において、
- 第16回大会、昭和38年7月17~20日、秋田県湯瀬温泉、湯瀬ホテル大広間において、
- 第17回大会、昭和39年7月14~17日、和歌山県白浜温泉、旅館むさ志大広間において、
- 第18回大会(会長北海道大学教授齋藤省三博士)は、昭和40年6月10日から12日まで、北海道登別温泉第一滝本館において開催され、10日の評議員会で、新評議員に東大の坂本峻雄、広島大の豊田英義、鹿児島大の露木利貞、北大の石川俊夫の4氏が選任され、同夜は町主催の歓迎宴が催された。翌日は午前中一般講演28類がスピーディーに発表され、続いて地獄谷、大湯沼の現地を福富、石川両教授の案内で見学し、午後は総会に次いで、昨年に引続いて「温泉諸科学の連繫について」のシンポジウムを登別温泉を例にとって私の司会で、地質学石川、地球物理学福富、地球化学西村、生物学広瀬、医学齋藤の諸教授の分担で行なわれ、盛んなデスカッションの下に充分の成果を収めた。同夜の懇親ビール・パーティーには登別太鼓の出演、美形の酒間の幹旋などがあり、まことに盛大なものがあつた。12日のエキスカッションには、約60名が参加し、8時にホテル前を出発してカルルス温泉からオロフレ峠、ここは私達の車

がこの年の初運転で、弁景温泉から昭和新山、壮督温泉を通過して洞爺湖温泉へ、ここでは泉源などの視察をした。中山峠から豊平峡、定山溪温泉を見学して札幌に出て解散した。「温泉科学」第16巻第2号参照)

昭和41年8月、本郷学士会分館で評議員会が開かれ八田会長他7名出席、40年度決算報告、41年度行なう予定、予算審議など行なわれた。

第19回大会(会長九州大学教授八田秋博士)は、昭和41年7月8日の別府温泉杉の井旅館における評議員会で大会の幕は開かれ、この席上通常会員会費を1200円、賛助会員会費を4000円に夫々値上げが承認された。翌9日の会場は、そのピーク時には参会者130名の多きに達し、一般講演も矢野教授の「南米の温泉」、大島教授の「ソ連の温泉」なる講演があり、午後は総会に続いて「温泉、地熱地域の地下探査について」地質調査所の中村久由博士の特別講演があり、引続いて一般講演を終わって、映画「温泉の神秘」が上映された。夜の懇親ビヤード・パーティーには荒金市長も姿を見せ、バンドと別府民謡趣味の会連中の踊を觀賞、心行くまで会員相互の歡をつくすことが出来た。10日午前中は一般講演、高安慎一博士の司会の下に「別府温泉に関するシンポジウム」が行なわれ、午後は市内観光と九大温研見学などを行なった。11日のエキスカッションは生憎天候不良であったが、参加者約160名で8時に出発、先づロープウエーで由布岳え、雲間から高崎山、別府湾の墨絵風の風光を賞することの出来たのは、雨雲のおかげでもあった。湯布院温泉を経てやまなみハイウエーを長者原へ、ここから道を右にとって大岳地熱発電所を視察、又一方14°Cの寒の地獄を見て、天候の都合上硫黄山行を中止して三俣ホテルで中食を済し、1300米の牧の戸峠から瀬の本高原を通過して、一路阿蘇山へ向った。ロープウエーで火口壁に立ったが、一瞬火口底を見ることが出来ただけで、霧のベールは厚かった。夜は一同やまなみ荘を借切って和気藹々裡に一泊した。(温泉科学第17巻2号参照)

昭和42年1月6日、学士会館本郷分館において評議員会開催、野口会長他8評議員が出席して、41年度決算報告、42年度事業案、予算案の審議が行なわれた。又第21回大会は芦原温泉が開催希望の旨、初田評議員から報告があった。

第20回大会(会長東京都立大学教授野口喜三雄博士)は、長野県軽井沢星野温泉において昭和42年9月1日から3日まで開催、1日の評議員会に20数名の人々が出席したことは珍らしいことで、この席上で評議員41名が推選された。2日は8時30分開会、出席者は120数名で、午前中に一般講演と総会、午後は長野県の温泉に関する地質、分析、医療関係のシンポジウムが行なわれ第1日目を終った。3日は午前中一般講演、午後は九州大学温研の古賀助教授の「ニュージーランドの温泉」と、東北大学鳴子分院の杉山教授の「温泉の医学的適応症をどう考えるべきか」の特別講演が行なわれ、続いて一般講演も行なわれたが、一般講演の出演は42題を教え、中には遙々韓国から来日の朴奎昌氏の「韓国温泉の化学的研究」など含まれていた。同夜の懇親会は盛沢山の映画などあり、盛況をきわめた。4日はエキスカッションの日で、8時30分ホテル前発、鬼押出し展望台博物館見学、万座温泉へ、ここで中食休憩中に白根山のお釜見物などした人もあった。ここから松代地震観測所の有名な地下施設を見学、篠の井の驥山館により、上田、屋代を経て鹿教湯温泉には暮色迫る頃到着という強行軍であった。翌5日は福井所長の案内で温泉療養所を視察して散会、一部の人々は大塩温泉を見学した。

尚、第21回、芦原温泉(会長京都大学教授初田甚一郎博士)、第22回(創立30周年記念)東京(会長東京大学教授大島良雄博士)と2回の大会について記さなければならないが、最近のことではあり、予定の紙数を超過したので割愛させていただく。